

かね

暁鐘の音

61

続・知識労働者

前回は、二〇世紀後半から、ブルーカラー労働者に代わって知識労働者が台頭してきたこと、ドラッグの知識労働者の定義などを紹介したが、知識労働者自身も、この数十年の間に大いに変質し、多様化している。特にコンピュータとネットワークの発達を急速に押し進めた。



知識労働者のもう一つの特長として、ブルーカラー労働者が労働に必要な知識や技能は自身で所有している、生産活動に必要な道具や設備は特定の場所にあった。そのために設備のある工場や会社に足を運ばなければ仕事にならない。それに対して知識労働者、特に最近の知識労働者は、知識や技能だけでなく、生産活動に必要な道具も自分の手元にある。職種によっては道具らしい道具を必要とすらないし、携帯型のパソコンを持ち歩いたり、さらには自宅のコンピュータと電話回線に繋ぐことで、何処にいても生産活動が出来るようになった。

このことは、単に「新しいもの好き」のエンジニアが出現したというだけでは済まない。組織に於ける管理の在り方にも影響を与える。彼らは生産工場を自分で持っていることで何処にいても仕事が出るのである。

。しかもコンピュータ・ネットワークがそれを強力に支援している。今や一度も顔を合わせることなく、ソフトウェア・システムの開発をネットワーク上で仕上げてしまうこともできる。仕様書や設計書の交換、更にはレビューもネットワーク上でやってみよう。作業中に見つかった問題点も、まるで声の届くところに居るかのようになり、その場でネットワークを介して解決する。勿論出来上がったプログラムはネットワークを介して集められ、実際に稼働させる。その際、関係者は必ずしもテストに立ち会うこともない。彼らは、一々立ち会わなければいけないようなプログラムは書かないし、そうでなければ、このような形態での仕事はこなせない。



この結果、ドキュメントの書き方も、レビューの進め方も、テストのやり方も変わってくる。労働の在り方も、契約の概念も変わってくる。変わらざるを得ない。やらなければならぬことはそれ程変わっていないが、やり方が時には大きく変わる。当然「管理」の在り方も坪外では済まない。



出てくる」という。その上「知識労働者を監督することはできない」(傍線・傍点は筆者)ともいう。

先に述べたように、今日の知識労働者は生産に必要な知識もノウハウも設備も、全て労働者自身が所有している。人によっては会社に行かなくても仕事にならないような時代ではない。彼らは心地よく働ける環境を選ぶ力を持ち入れた。限られた自分の時間の中で、自分を最大限に活かせる場を求めることが出来る。知識労働者たる条件を満たしながら、より効果的に貢献できる道を選ぶ。必ずしも金銭だけでは動かない。金銭以上に知識労働者たる条件を維持することの方に価値を置いている。そのような労働者を、かつてのブルーカラー労働者のように「監督」することはできない。彼らに対して出来ることは「活かす」ことだけである。



このことは言い換えれば、そのような管理者もまた、知識労働者であることが求められているとも言える。これからは管理者にも相当な知識とノウハウが必要になってくる。勿論、その知識も「陳腐化」とは無縁ではない以上、継続的学習を欠かすことはできない。こうなればもう「プロの管理者」の出現であり、更には「プロの経営者」の出現である。

ドラッグの言う「命令されず、命令もできない」マネジメントというのは、管理する対象が「知識労働者」であると同時に、自身もまた「知識労働者」であることを意味している。したがって、単にその分野の経験者であるというだけでは、マネージャーは勤まらなくなっていく。

く。勿論その分野の経験者であることとは大いに役に立つが、問題は「どのように経験してきたか」であり、他に何を手に入れたかである。さらに言えば、継続学習の習慣が身に付いているかが問われる。この習慣は上着を着がえるような訳にはいかない。



二〇世紀の後半、知識労働者の出現によって生産性は大きく向上した。それはブルーカラー労働者だけに求められているのではなく、今日では知識労働者自身にも求められている。そしてホワイトカラーと呼ばれる人たちにも、「仕事に対する新しい

今月の言葉

「人間の真実の正しさは、礼節と同様、小事における行ないに表れる」 カール・ヒルティ

先日、あるテレビ局のニュース番組の中で、「憤激」の場面として

喫煙マナーの悪さについてのレポートが報道された。人込みの中を平気で歩きながらの喫煙する人たち。駅のホームでの喫煙もひどい状況である。確かに山手線の駅は喫煙する場合場所が決められていて、その他の場所では終日禁煙の筈であるが、決められた場所で吸っている人は僅かしかない。隣に誰が居ようと、風がどの方向に吹いていようと、全くお構い無しである。テレビ局の人が注意をすると、「どこで吸おうと勝手だ!」「おまえに言われる筋合いはない」と居直ってくる人も少なからず居る。一体、誰に言われれば素直に聞くというのだろうか。一見したところ、ネクタイをした何処にでもいそうなサラリーマンである。こ

いアプローチと思考方法」が求められているのであり、「継続学習の習慣」が求められているのである。「団塊」の世代・彼らは戦後の復興期に、絶対的な労働者不足の世代の後を補う形で大挙して社会に繰り出した。前の世代の人口が少なかったこともあって、早くから「イス」を手に入れることが出来た世代でもある。そして細かく区切られた役割の中で二五年間過ごしてきたが、此処に来て「基本的な態度、価値、考え方」を変えることが求められている。彼らは今、知識労働者としての管理者に転換できるかが問われているのである。

の人は、どのような姿勢で仕事をしているのかと思う。報道によると、歩きタバコで子供が失明寸前の事故も起きているという。この時の加害者はそのまま立ち去ってしまった。私もズボンに焼かれそうになった経験がある。歩きタバコは、当然の帰結としてそこらじゅうに捨てられる。駅に近づくとつれて、道の両端には踏み潰された吸いながら一杯である。我が家の隣の空き地にも火の付いたタバコを捨てられないように、適度に草刈りをしなければならぬ。全くマナーも何もあつたものではない。とくに他人を思いやる心が乏しい過ぎはしないか。戦後の「民主主義」教育の中で「自由」を正しく教えなかったつけなのか。このままでは、シンガポールのように法律で取り締まるしかなくなる。